

Vasubandhu's Pañcaskandhaka. Critically edited by Li Xuexu and Ernst Steinkellner with a contribution by Toru Tomabechi

箕 浦 暁 雄

一

チベット自治区に驚くほど貴重な文書館が存在した。本書を含む Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region (STTAR、西藏自治区梵文文本系列丛书) シリーズの出版は、チベット文化圏における知の宝庫とでも言うべき文書館が徐々にその姿を見せはじめたことを意味している。

ポタラ宮やノル布林カ宮に膨大なサンスクリットで書かれた仏教写本が現存するという情報は、一九八〇年代から徐々にヨーロッパにもたらされていた。仏教写本が確かにチベット自治区に現存するという情報が西洋文化圏にもたらされ、その詳細が知られるようになった経緯については、エルンスト・シュタインケルナー博士の報告 (A Tale of Leaves: On Sanskrit Manuscripts in Tibet, their Past and their Future (Amsterdam: Royal Netherlands Academy of Arts and Sciences, 2004.) によってその一端を知ることができる。また、チベット自治区所蔵サンスクリット写本の目録を作成したルオ・ヂャオ教授が、二〇〇八年十月北京大学で開催された梵文写本研究セミナー(梵文写本検討会)において、目録作成に至る経緯について報告を行っている。松田和信教授は、このルオ・ヂャオ教授の報告をいち早く紹介され

た(チベット自治区に保存された梵文写本の目録編纂―その二十有余年の紆余曲折―『仏教学セミナー』八八号、二〇〇八年)。現在我々が知り得ることは限られており、どちらもチベット自治区写本研究開始の背景を報告するという点で実に興味深い。

このSTTARシリーズは、オーストリア科学アカデミー・アジア文化思想史研究所 (Institut für Kultur- und Geistesgeschichte Asiens der Österreichischen Akademie der Wissenschaften) と中国蔵学研究中心 (China Tibetology Research Center) とにおける同時出版という形を採る。周知の通り、シュタインケルナー博士、ヘルムート・クラッサー博士、ホルスト・ラシッチ博士によるジネンドラブッディ (Jinendrabuddhi) の『プラマーナサムツチャヤテーカー』 (*Pramāṇasamuccayatikā*) 第一章を皮切りに、ラサのポタラ宮やノル布林カ宮に所蔵されてきたサンスクリット写本の校訂出版が開始された。本書『五蘊論』 (*Pañcaskandhaka*) の校訂は、同STTARシリーズの第四巻として出版されたものである。校訂者シュタインケルナー博士についてはあらためて紹介する必要はないであろう。共に名を連ねるリー・シェージュ博士は、中観派の書物に関心を抱き大谷大学に留学した経験を持つ。現在は中国蔵学研究中心に所属する若手研究者の一人である。

読者諸氏の便宜をはかり、以下に既刊の書籍を列挙しておく。ただし、第三巻はウィーン・北京の共同プロジェクトによるものではない。

- ① Ernst Steinkellner, Helmut Krasser, Horst Lasic (eds.), *Jinendrabuddhi's Pramāṇasamuccayatikā*, Chapter 1, Part 1: Critical Edition, Part 2: Diplomatic Edition, Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region No.1, Beijing: China Tibetology Publishing House, Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2005. (2vols.)
- ② Steinkellner(ed.), *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya*, Chapters 1 and 2, Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region No.2, Beijing: China Tibetology Publishing House, Vienna: Austrian Academy of Sciences

Press, 2007.

- ③ Jjang Zhongxin(ed.), *Palm-leaf Manuscript of the Sanskrit, Saddharmapundarikasūtram*, III 1: Kept in the Potala Palace in Tibet, A Romanized Text., III 2: Collected in the Norbulingga of Tibet, Written in A.D. 1065, Romanized Text., III 3: Collected in the Norbulingga of Tibet, Written in A.D. 1067, Romanized Text., Beijing: China Tibetology Publishing House, 2006. (3vols.)

これらチベット自治区のサンスクリット写本校訂出版に関する最も新しい研究報告は、現在のところ、苦米地等流博士によるものである。アジア文化思想史研究所と中国蔵学研究中心との共同プロジェクトに関する言及がある（『理趣経（百五十頌般若経）』の newly discovered Sanskrit manuscript 『高野山大学密教文化研究所紀要』一二号、二〇〇九年）。

ルオ・ヂャオ教授の目録によって確認されているポタラ宮所蔵写本のうち、ヴァスバンドゥ（Vasubandhu）の『五蘊論』と関連してとりわけ重要なのは、ステイラマティ（Sthiramati）による『五蘊論』注釈書（*Pañcaskandhakaribhāṣā*）サンスクリット写本の現存が確認されていることである。目下、ミュンヘン大学のヨヴィタ・クラマー博士が校訂本の出版を目指し準備中である。また、我々を驚かせたのは、同じくステイラマティの注釈書『俱舍論実義疏』（*Tattvārthā Abhidharmakośābhāṣyaṅkā*）サンスクリット写本が確認されたことである。こちらは小谷信千代博士を中心に、まず第一章「界品」注釈文の校訂出版を目指し解読研究を開始している。

二

散逸したと思われるきたヴァスバンドゥの著作の原典が新たに公開されたことの意義は大きい。これまでチベット語訳や漢訳でしか読むことができなかった『五蘊論』のサンスクリット写本が、第1フォリオ（写本冒頭7行分）を欠くもののほぼ完全な形で現存したのである。とはいえ、諸法の規定が簡潔に述べられるという書物の性格上、『五蘊

論』は、サンスクリット文なしにチベット語訳と漢訳に基づいて読み解くことが可能な仏典であるとも言える。よって、サンスクリット文が公開されたことを受けて、我々がまずなさなければならぬことは、原典が現存するその重要性を強調すること以上に、『五蘊論』注釈書や『五蘊論』と密接に関連する文献に基づいていかなる視点を持った解説研究が今後必要であるのか的確な見通しを立てておくことであろう。おそらく、本書『五蘊論』校訂本を書評することの意味は、まずもってこの点に尽きるに違いない。

本書の内容は以下の通りである。英語序文、中国語序文、凡例と略号、『五蘊論』Critical Edition、『五蘊論』Diplomatic Edition、写本の写真複写（『五蘊論』とカバーフォリオに書写されている典拠不明のテキスト）、参考文献、付録（1. CTCRC Tanjur のチベット語テキスト、2. 大正新修大藏経所収漢訳『五蘊論』テキスト、3. 苦米地博士による、カバーフォリオに書写されているテキストの Critical Edition と Diplomatic Edition）。なお、付録1と2は、サンスクリットテキストに従ってパラグラフが設けられている。

では、実的確かつ簡潔に纏められた序文の内容に沿って本書を紹介しておこう。前述した通り、加えて『五蘊論』サンスクリット文を参照可能になったいま、次に我々が見定めておくべき見通しについても触れておきたい。

本書では、『五蘊論』サンスクリットのタイトルをひとまず『*Pañcaskandhaka*』と定めている。この『五蘊論』写本のコロフォンには『*pañca skandhāḥ*』(7b6)と記載される。しかし、ポタラ宮に現存することが確認されたステイラマティ『五蘊論』注釈書のサンスクリット写本には『*Pañcaskandhakavibhāṣā*』と記されていることが新たにわかつている。これまでは、『唯識三十頌釈』(Trisikaṣṭiṅgabhāṣya)本文中に、『*Pañcaskandhakopambandha*』と表記されることがシルヴァン・レヴィ校訂本によってよく知られてきた。また、チベットの伝承にある『*rab tu byed pa (prakaraṇa)*』という表記は、中国の伝承とも一致するが、サンスクリット写本には見いだされない。本書では言及されないが、敦煌チベット語写本のなかに『五蘊論』とその注釈書が現存する。敦煌写本のタイトルもまた『*rab tu byed pa*』である

ことを付け加えておこう。ともかくここでは以上の通りの表記があることを確かめておくより仕方ない。

いまのところ、この『五蘊論』写本を直接閲覧することはできない状況にある。本校訂作業は、中国蔵学研究中心に所蔵される写真複写に基づいて行われている。このプロジェクトでは、写本が一本しか現存しない場合、デーヴァナーガリー表記の Critical Edition とローマ字転写表記の Diplomatic Edition 両方を提示するという方針を採る。Critical Edition では、脚注を上下二段組みにして、他の文献の参照すべき箇所を脚注の上段に、校訂上の注記を脚注の下段に、それぞれ分けて注記される。Diplomatic Edition の提供は、写本のなかで文字がどのように筆写されているかをできる限りそのまま研究者に提示するテキストを準備すべきという意図による。この方針は、写本そのものを直接閲覧することがかなわない現状に鑑みての措置である。本書の場合は、加えて写本の写真複写の掲載がかない、必要に応じて写本を直接確認することができるようになってきている。なお、当該写本の概況については後に触れる。

ともかくにも、この校訂をスムーズに進め、非常に煩雑な作業を実にシステムティックに処理し版下を作成することに成功しているのは、苦米地博士の協力によるところが大きい。XML でマークアップしたテキストを準備し、それを変換して組版ソフト L^AT_EX で版下を作成するという博士のコンピュータによる綿密かつ手際よい作業が、この困難な校訂出版を下支えしていることを付言しておく必要があるろう。

さて、ヴァスバンドウの『五蘊論』という書物は、『阿毘達磨集論』(Abhidharmasamuccaya) 第一章でアサンガが示して見せたのと同じく、瑜伽行唯識学派の伝統に基づき、法を体系的に提示してみせたものである。本書序文が述べる通りである。『五蘊論』著述の意図については、それに加えて、ステイラマティ『五蘊論』注釈書冒頭の記述 (Peking hi 1b4H) を参照しておく必要がある。ステイラマティは「五蘊をはじめとする論 (prakarana)」を著すのはなぜかとの問いを立て、それに対してまず「一切の諸法の自相と共相に通達するため」と答えている。この答えは、「Yogācārahūmi」をはじめとする諸々の論 (sāstra) のなかですでに法相について省察しているので無意味ではない

かとのさらなる問いを導きだす。これに対して、ステイラマティは三つの理由を述べて『五蘊論』著述に意味があるのだと解説する。その注釈に基づき大きく捉えておくならば、『五蘊論』は『瑜伽論』(Yogācārahīnā)の綱要を提示するものとして位置付けられていると了解できる。この点については、山口益・野澤静證『世親唯識の原典解明』(法蔵館、一九五三年、pp.136-139)の指摘が参考となる。

『五蘊論』に見られる各々の法の規定は、『俱舍論』(Abhidharmakośhasūtra)やそれ以前の『婆沙論』(*Mahāvibhāṣā)などにおける規定、つまり説一切有部アビダルマで定められてきた規定と一致する場合がほとんどである。それは、言うまでもなく瑜伽行唯識学派の体系が説一切有部アビダルマで培われてきた伝統に基づいているからに他ならない。しかし、本書序文が言及する通り、説一切有部アビダルマの伝統的規定文に留まらない『五蘊論』に見られる法の規定が、『俱舍論』のなかで異説として引き合いに出される場合がある。信 (śraddhā)・軽安 (praśādhī)・無慚 (āhṅkya)・無愧 (anapatrapya)などの規定においてである(本書序文注4参照)。

例えば、『五蘊論』のなかで、信については「信とは何か。業と果と諦と宝とに對する確信であり、心の澄淨である」(śraddhā katamā, karmaphalasaṅkyaratneṣv abhisampratyayas cetasaḥ prasādhā; 原文 abhisampratyayas)と、その規定が述べられる(本書p.6)。いっぽう『俱舍論』における信の規定は、大善地法に包摂される諸法の規定文に見いだされる。そこでは信とは心の澄淨であると述べたうえで、「諦と宝と業と果とに對する確信である」とは他の者たちの見解である ([Pradhan 55.6-7] tatra śraddhā cetasaḥ prasādhā, satyaranakarmaphalābhisampratyaya ity apare; [Peking gu 72b4-5] de la dad pa ni sems dang ba'o. gzhan dag na ni bden pa dang dkon mchog dang las dang 'bras bu mams la mngon par yin ches pa yin no zhes zer ro.; [Xuangzang T'aisho29 1962-4] 此中信者令心澄淨。有説。於諦實業果中現前念許故名爲信。)という仕方で言及される。この「他の者たち」が何者を示すかについては、ステイラマティの『俱舍論実義疏』やヤシヨミトラ (Yasomitra)による注釈書『俱舍論明瞭義』(Sphuzārthā Abhidharmakośavyākhyā)にも『順正理論』(*Nyāyānusārin)にも

具体的な言及はない。

ともあれ、『俱舍論』のなかで説一切有部説と立場を異にする学説が引かれるとき、それをどのように読み解くかは『俱舍論』研究の重要な論点のひとつである。本書序文は、いわゆる「経量部」という立場は往々にして“Yogācāra abhidharma in disguise”と理解するとよいつのロバート・クリツァー博士の見通しを紹介すると同時に、注意深い検討が必要であることも示唆する。

信の概念規定について言えば、「心の澄浄」と規定するに留まらず、いかなる問題関心を持って「業と果と諦と宝」とに対する確信」と新たに規定しておく必要があったのか問うておかなければならない。根底には、信とは何かという初期經典以来の問題意識があろう。この視点で概念規定の展開が把握できてこそ、説一切有部アビダルマと瑜伽行唯識学派における教義学説の枠組みの相違に光をあてることになる。

また、注釈者が『五蘊論』の記述を根拠に『俱舍論』の文脈を読み解く場合がある。ヤシヨミトラは『俱舍論明瞭義』のなかで、瑜伽行唯識学派の体系を持ち出して『俱舍論』の文脈を読み解こうと『五蘊論』を引く。それに対してステイラマティは『五蘊論』を引かず、あくまで説一切有部の教義学説体系のなかで『俱舍論』の文脈を了解しようとする。評者はかつてこのような解釈例を紹介したことがあるが、注釈者が『五蘊論』を用いてどのように『俱舍論』を解釈しようとするのか精査することは、ヴァスバンドウの『俱舍論』著述の意図を探るうえで非常に重要である（ステイラマティとヤシヨミトラの大地法理解『印度学仏教学研究』52-1、二〇〇三年 pp.138-141; Shrivani and Yasomitra: On the Possibility of Coexistence of Mental Dharmas Described in the Two Commentaries on the *Abhidharmakośābhāṣya*, XVIIth Congress of the International Association of Buddhist Studies, 2008. □頭発表）。

繰り返しですが、『五蘊論』における法それぞれの規定は、ほとんどの場合『俱舍論』やそれ以前の『婆沙論』などにおける規定、すなわち説一切有部アビダルマの規定をそのまま踏襲する。そのうえで、説一切有部アビダルマと瑜伽

行唯識学派における異なった教義学説の体系を熟知した注釈者たちの実に注意深い態度を知ることができる場合があり興味深い。

例えば、初期經典の相应部 (*Samyutta-nikāya*) には、五蘊のなかの想について次のような記述がある。「比丘たちよ、いったい何を知覚と称するのか。比丘たちよ、知覚するが故に想と名付けられる。〔では〕何を知覚するのか。青を知覚し、黄を知覚し、赤を知覚し、白を知覚する。知覚するから想と名付けられる」(PTS版 *Samyutta-nikāya* 3 87)。こういった教説を受けて、『法蘊足論』 (*Dhammasakundha* [aśho26 488c3-4 参照]) をはじめ『婆沙論』 (*Taiśho27 999a7-8* 参照) や『俱舍論』に至るまで、想という法は「対象の *nimitta* を把握すること」(『俱舍論』 [Pradhān 10.15-17] *saṃjñā nimitto* *grahaṇānīkā*) と規定されてきた。この規定は『五蘊論』においてもそのまま用いられる (本書 P4 想の規定参照)。また、ステイラマティは『五蘊論』注釈書のなかで「*nimitta* とは、青・黄などの境の差異である所縁を定立する因である。その場合、*nimitta* を把握するとは、これが青である。これが黄である」と判断することである」(Peking hi 16a3-4) と「*nimitta*」の語について解説する。以上のことから、想は対象の *nimitta* の把握と規定され、「*nimitta*」は把握対象の定立因という意味で用いられることが確認できる。これが説一切有部アビダルマならびに瑜伽行唯識学派における想という法の基本的な規定なのである。

そのうえ、例えば『瑜伽論』「撰決択分」では、さらに「*nimitta*」とは「発する言葉の所依 (*āśraya*) となる事態 (*vastu*)」(Peking zi 302b3, *Taiśho30 696a2*) と説明される。つまり、言葉で表現されるものとして把握対象を掴み取ることを意味する。このような「言葉の所依」という規定は、初期經典やアビダルマ文献には見られなかったものである。そこには、苦悩を引き起こす分別を「言葉」という概念を用いて捉え直そうとする視点がある。

ステイラマティは、『俱舍論』における想の規定を注釈する時には「把握対象の定立因」という説一切有部の規定を忠実に注釈し、『五蘊論』の注釈においては、さらに「*nimitta*」を「言葉を通して、あるものが対象の自性として増

益する」(Peking hi 16a8)と注釈する。どれほどの意味で「言葉」という概念を用いるかは十分検討すべきであるが、そこには新たな視点が持ち込まれており、すなわちそれが瑜伽行唯識学派の体系を前提とした注釈であることは確かである。言うまでもなく『俱舍論』と『五蘊論』はどちらもヴァスバンドウの著作であるが、ステイラマティの実に注意深い注釈態度には注目しておく必要がある。『五蘊論』サンスクリット文が参照可能になったことを受け、さらには遠からず刊行されるであろうステイラマティの『五蘊論』注釈書のサンスクリット文を手元に置き、他の瑜伽行唯識学派の文献ならびに説一切有部アピタルマの文献も併せて可能な限り丹念に読み解くことが今後求められる(箕浦曉雄「ステイラマティ『五蘊論』和訳一行蘊(一)」『仏教とジャイナ教』平楽寺書店、二〇〇五年 参照)。

ここで「説一切有部アピタルマの文献も併せて」と述べたのは、ステイラマティによる『五蘊論』注釈書には、『俱舍論実義疏』と共通する注釈文が見いだされるからである。また、ステイラマティは『順正理論』の文脈を熟知しており、『俱舍論』を緻密に読み解くために『順正理論』における義論の展開に沿って『俱舍論実義疏』を著していると言える箇所が多々ある。ステイラマティという注釈者がサンガバドラの著作に極めて詳しく自らの著述に盛んに『順正理論』を用いることは、強調しておいてよい。評者がチベット語訳で確認している限り、ステイラマティは『五蘊論』注釈書にまで『順正理論』の一節をサンガバドラの名と共に引くことがわかっている。「受蘊」の注釈文(Peking hi 13b7-16a2)においてである。詳細については稿をあらためなければならぬが、ともかく瑜伽行唯識学派の文献にサンガバドラの言及が引用されるのは極めてまれな事例である。

次に、本書序文に沿って、当該写本の特徴について確認しておこう。すでに触れたが、この写本は最初の7行を欠いていることを除けばすべて現存する。従って、Critical Edition 冒頭(写本7行分)は還元サンスクリットであることに注意して頂きたい。現存するのは、全6フォリオ分であり、最初のフォリオには、チベット文字・ウメで“Phung po lngai rab tu byed pa”と記されている。いっぽう裏面には、典拠不明の文章が8行分筆写されている。当

該文章の内容については後に若干言及する。

おそらくこの典拠不明の文章が筆写されているページはもともと表のページで、その裏面の空白のページが後になつて、この『五蘊論』の表紙としてタイトルが書かれるのに用いられたのではないかとの推測がなされている。『五蘊論』冒頭の欠落箇所は、ちょうど失われたフォリオ¹¹⁰の7行分に相当する。第2から第7フォリオの左側余白にはフォリオ番号が付される。

大部分のページは、1行に55〜58文字、7行からなる。第5と第7フォリオは、52〜54文字、5行からなる。第4フォリオ表(裏)のみ、55〜58文字、8行からなる。

この写本の前半(2a〜4b)と後半(5a〜最後)は、それぞれ異なつた二人の書き手によつて筆写されたことが認められる。両者とも文字はネワリーである。第一の書き手によるフォリオは文字が薄れており、おそらく実際に読むのに利用されていたと思われる。第二の書き手によるフォリオは古く痛んだ写本に替えて書き直されたのではないかとの推測がなされている。

この写本には、sa 229 cai/vai kr dvi (samvat 229 caire/vaisakhe kṛnapakṣe dvitīye) と年号の記載があり、これは1108/1109年に相当する。その他、本書序文で触れられる古文书学上の指摘については、ぜひとも本書に掲載される写本によつて確認して頂きたい。

三

カヴァーフォリオに書写されている典拠不明のテクストには実に興味深い語句が並んでいる。『撰大乘論』(*Mahāyānasamgraha) 冒頭などに「アビダルマ大乘経」という名称と共に引かれる一節が、筆写されている。本書の脚注に記される通り、カヴァーフォリオのサンスクリット文は、ステイラマテイの『三十頌釈』や『宝性論』

(*Ramagoharvibhaga Mahāyānottaratantrāsāstra*) と一致することが確認できる。

あるいはまた、『入楞伽經』(*Laṅkāvatārasūtra*)の經典名と共に短い文章が引用される。ただし完全に一致する一節を『入楞伽經』に見いだすことができない。続いて、「五法とは名称(*naṃan*)と相(*nimitta*)と分別(*vikalpa*)と正智(*saṃyagjñāna*)と真如(*taṃhata*)である」という説明が記される。これは『瑜伽論』や『入楞伽經』などに見られる、いわゆる五事論に関する記述である。

これらいずれも極めて興味深い文章であるが、現存する特定の仏典に比定し得ない。何らかの仏典の一部分が筆写されているのではなく、いくつか個別の文章が筆写されているにすぎないと見るべきであろうか。いまのところ、決定的な判断材料はない。

四

本書を用いる者は、本校訂が明確な基本方針に基づく実に堅実な校訂作業によって成された有益な研究資料であることを知るであろう。本校訂では、瑜伽行唯識学派のアビダルマと形容しておいて良い『阿毘達磨集論』、そして『瑜伽論』や『顕揚聖教論』(**Āryadeśanāṭṭhikhyāvanasāstra*)を参照するという基本方針が立てられ、必要十分な注記がなされている。評者はステイラマティの注釈書やアビダルマ文献にまで踏み込んで諸々言及してきたが、これは校訂の不十分さの指摘を意図するものではない。本書の刊行によって、基礎資料として申し分のないテキストが提供されたと見えよう。

シュタインケルナー博士をはじめとする本研究プロジェクトを推進してきた研究者たちは、チベット自治区サンスクリット写本の解読研究に着手するまで、実に忍耐強く準備を進めてこられた。このことはいくら強調してもしすぎではない。また、博士が中国の若手研究者育成の重要性を繰り返し強調しておられることも申し添えておかなければ

ならない。

本研究によって、シュタインケルナー博士が言う「アジア最後の隠された宝のひとつ」(A Tale of Leaves p.30)が我々の前に現れたことになる。膨大なチベット自治区写本の解説という極めて重要な研究に道筋を付けられたことにあらためて敬意を表したい。最後にウンベルト・エーコ『薔薇の名前』(河島英昭訳、早川書房、一九九〇年)の一節を引いて、本書の紹介を終えることとする。「書物にとつての喜びは、読まれることにある。書物は他の記号について語る多数の記号から成り立つのだが、語られた記号のほうもまたそれぞれに事物について語るのだ。読んでくれる目がなければ、書物の抱えている記号は概念を生み出せずに、ただ沈黙してしまふ」。

Vyubandhu's Panaskandhaka, Critically edited by Li Xuexu and Ernst

Steinkellner with a contribution by Toru Tomabechi.

China Tibetology Publishing House, Beijing, Austrian Academy of Sciences
Press, Vienna, 2008.

ISBN 978-3-7001-6109-7, ISBN 978-7-80253-033-1

xxiii+107 pages 定価 20.00 円